

形成的評価としての「名札シール」

Using Name Tags as a Means of Formative Evaluation

齊木ゆかり（東海大学）

要 旨

筆者は「クラス目標」を効果的に学習を成立させる事とした。そのためには学習者と教師が信頼関係を築くことが必要だと考えた。名札シールによる実践は信頼確立に寄与できるのではないかと考え、実践した。実践した結果、名札シールは個々の学習者の学習における気づきを促し、学習環境を形成し、クラスの目標を達成する可能性があることがわかった。

I set the class goal of this year to make good class atmosphere. For that purpose, I thought the relationship between a teacher and the students were important. 'Name Tags' helped to achieve the goal.

【キーワード】形成的評価，教室授業，評価と実践の循環

1. はじめに

本稿の目的は2006年に行われた実践研究フォーラムの発表とその後のディスカッションの結果を発表することにある。具体的には、(1)「名札シール」を使用した形成的評価の概要、(2)フォーラム参加者の質疑応答から見えてきたもの、(3)小グループディスカッションの収穫である。

2. 「名札シール」を使用した形成的評価

形成的評価としての「名札シール」の目的は2つあった。ひとつ目の目的は教師と学習者、また、学習者同士のラポール形成であった。もうひとつの目的は学習者による授業評価の実施であった。この試みを行った背景には筆者のクラスの問題が存在した。具体的には、学習者の(a)名前が覚えられなかったこと、(b)ニーズや感想が得られなかったこと、さらに、(c)教師のアドバイスが伝わらなかったことである。(a)の問題を解決する試みとして学習ファイルや立てかけ式名札(Rubrecht, 2006. 19-20)を試みたが、問題解決には至らなかった。そこで「名札シール」による評価法を考えてみた。この方法を紹介する前にクラスの問題点(a)から(c)について述べる。

問題点とは

(a)の「学習者の名前が覚えられない」という問題は、クラスの中に同じ名字の学習者が多数いる場合、週1回の授業で、学習者の名前と顔を一致させる機会が少ない場合に生じた。また(b)の「学習者のニーズや感想が得られない」は消極的な学習者は何を考え、何を求めているかが容易に把握できないという問題である。(c)の「教師のアドバイスが伝わらなかった」は教師のアドバイスを素直に学習者が実行しないという問題である。以上述べた(a)～(c)の問題点を解決するために考案したものが「名札シール」である。

3. 「名札シール」の実際

3-1. 「名札シール」とは

「名札シール」は筆者が名付けた。これは市販されているシールタイプの紙のことで、「ラベルシート」、「紙ラベル」、「ラベル用紙」等と呼ばれている。既に裁断されているものもあるが、1枚の大きなシートの場合は、縦3.5cm、横7cmサイズに裁断する。このシールを名札兼授業評価用に利用した。

3-2. 「名札シール」の目的

「名札シール」の目的はクラスの雰囲気づくり、あるいは関係づくりとした。クラスの雰囲気や関係を作るための基本はお互いに名前を覚えることから始まると考えた。そして、この小さな紙が両方を可能にできるか実験してみた。

3-3. 実施概要

調査対象クラスは大学の学部の三つの授業であった。二つの授業は自由選択科目で受講生は留学生より日本人が多く、ひとつは留学生だけの必修科目クラスであった。実施期間は2005年度秋学期（12週）と2006年春学期（12週）である。

3-4. 「名札シール」の利用手順

「名札シール」評価法の手順は以下の通りである。

教師は授業開始前に教室の入り口に「名札シール」、クレヨン、記録用紙を置く。

学習者はその日の自分の気持ちを表す色のクレヨンを選び、「名札シール」にその日呼ばれたい自分の名前を書き、「名札シール」の裏面の紙を剥がし、洋服の胸の部分に貼る。

教師も同様に「名札シール」に呼ばれたい名前を書いて洋服に貼る。

例)「ゆかり」

学習者は自分の記録用紙を持って席に着く。なお、初回授業では記録用紙裏の学習者の背景に関する項目（学生番号、学科名、氏名、授業に関連した質問項目）に記入する。

— 図1) 「名札シール」を貼る面の記録用紙面)

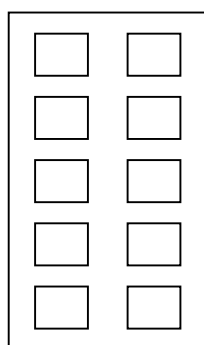
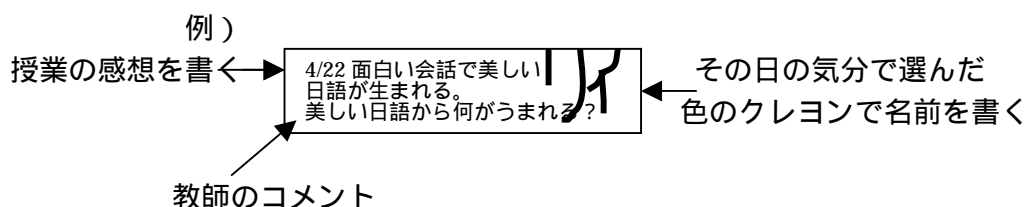


図2) 学習者の背景(裏面)

授業を行う。

学習者は授業終了前に「名札シール」を洋服から剥がし、記録用紙（A4）に貼り、「名札シール」の余白にその日の授業で感じた事、気が付いたことを一言書いて教師に提出する。

教師は学習者のコメントを読み、「名札シール」の余白に1文程度のコメントを書く。



次回からは から を繰り返すが、記録用紙は同じ物をコースの最後まで使用する。

コースの最終日に教師は最後のコメントをつけた記録用紙を学習者に返す。

「名札シール」を試みて前年度の3点の問題点が改善された。その理由には以下の3要素が関係したと考えられる。まず、1番目はクレヨンで学習者が名前を手書きすることである。これは色と筆跡が記憶に残り、学習者の顔を想起するのに役立ったと思われる。また手書きされた名前からわかったのは出席簿と違う名前と呼ばれたがる学習者が存在したことである（例）イカ、デニーズ）。

2番目は一言コメントを「名札シール」に書き加えたことである。一言コメントによって、学習者のニーズや感想が得られた。コメントは主に授業についての具体的な難しさや楽しさ、自分自身に関する気づきなどであった。コメントからは教師のアドバイスを学習者が受け入れたことも書かれていた。ある学習者はスピーチをしている時、いつもは無意識に足を鳴らしていたが、教師のコメントの後、初めて足を鳴らしているのに気付いたと述べた。それは良いクセではないと思い、今後直したいと述べた。その後のスピーチを観察すると、その学習者がスピーチ中に足踏みをする回数が減少していた。

3番目は教師も「名札シール」を作成し使用することである。実際に教師も学習者と同様にその日の授業の始まりに自分の気持ちを表す色で呼ばれたい名前を書き、胸に貼ることによって、学習者の気持ちが理解しやすくなった。例えば、疲れた状態で授業に臨まなければならない時筆者が選んだ色は赤であった。その時赤い色を使うのは元気というより、元気になりたいからであると感じた。また、授業直後にコメントを書くので、記憶が新しいうちに内省ができることもわかった。「名札シール」を導入して、教師が学習者の一人一人に興味を持てば、学習者の名前を覚えることは可能であり、人数、同じ名字の多さ、授業の担当回数は大きな問題にならないと感じた。「名札シール」の字のイメージと学習者の外見とが一致していれば、「やはり！」と心に残り、一致していなくても、意外性が生まれ、記憶に刻まれやすかった。また「名札シール」に書かれた名前と呼ぶと、学習者は嬉しそうな顔をした。コメントを書く余白は「名札シール」のサイズ上限られ1行程度だったが、それが書きやすさに繋がった。学習者の感想に教師が返事を書くこと次週は学習者からの反応が返って来た。

例)「面白い会話で美しい日本語が生まれる。」<美しい日本語から何が生まれる?>4月22日

「いい成績だと思います。」<では、いい成績のため何をする?>
5月20日

「もっと努力しなければ...。」5月27日

「名札シール」に書かれたコメントには「審判ではなく、参加したい」のように、学習者のニーズも観察できた。これらのコメントはその後の授業計画の参考にした。さらに「名札シール」の利点はコメントの保存の簡便さにもある。シールのため洋服から剥がしても記録紙に貼る程度の粘着力は残っている。A4 1枚の記録用紙に学習者個人の全授業のコメントが貼れるので、見やすくなった。また、サイズ上、コメントを書く時間がかからなかった。さらに、教師も授業直後にコメントが書けるので、記憶が鮮明なうちに授業の振り返りが行えるという利点があることもわかった。

現在は「名札シール」をクラス人数に関係なく使用している。「名札シール」NSを授業に導入する事で学習者との関係が作れ、対話が生まれやすい状態になると感じたからである。副次的な利点もあることもわかった。シールを数える事で学習者が何回休んだかがわかるようになった。また、欠席した学生の記録紙に風邪の具合や引っ越しの様子を尋ねる言葉を一言書くことで、次回に出席した時の関係保持にも繋がった。

2. 発表の質疑応答

発表後会場から以下のような質問が出た。

Q1: 学生のレベルは?

A1: 学部生であったので、中級、2級以上のレベルであった。

Q2: 日ごとに名前が変わるが、その日の名前で呼ぶのか

A2: そうである。

Q3: 授業でペンネームを使うことがあるのだが、別の人格が形成される。普段の学習との違いはあるのか。

A3: 普段を知りようがなかった。それはそれでいいのではないかと思う。

Q4: 普段もあって総合的な人格ではないか。

A4: そのために何をしたらいいのだろうか。

Q5: 改善点はコメントされたか?

A5: コメントされた。

Q6: 授業の対する満足度も上がっているといえるか

A6: 事後アンケートでは満足という結果だったが、それが名札シールのせいかどうかは不明。名札シールに関する項目は全員がよかったという結果だった。

Q7: 時間配分は?

A7: 学生たちはさほど時間をとっていない。授業終了直前に2、3行。教師も1行だけ。

Q8: 今回の実践は30名のクラスで効果があったということだが、学生の人数が少

なく、学生の顔が見える状況でも、採用するか。

A8: 週に3回持てればなくてもよい。週1回、2コマだけなら採用する。最初は名前を覚えるためだったが、学生を知るためのツールとしてする予定。授業回数が多いと面倒がられるかもしれない。

参加者の関心は普段とは異なる名前を使用すること、また、コメント作成の時間配分であった。サジェストペディアでは新しい名前が過去の学習に対する負のイメージを消し、学習に対する肯定的な態度を作るために役立つと述べる。「名札シール」の名前は、必ずしも別名である必要はなかったのだが、名字や名前と明らかに異なる名前を書いた学習者がいたことは興味深い。また、コメントを書く時間を授業の妨げになると感じた参加者がいたようであるが、1、2分で終わるため、時間的な問題とはならないであろう。教師のコメントも同様である。30人クラスで30分以内でコメントができた。

3. ディスカッションの結果

発表後、大学で教える2人の教師とのディスカッションの機会を得た。そこでまず、共通の認識として、形成的評価をいい授業を作るために行うと考えていたことがわかった。そのためには、人間関係、教師だけでなく学習者からの発信の場の提供、具体的には、インターネット掲示板、クラス日誌、自己評価、ポートフォリオやジャーナルの使用が可能であると話し合われた。更に、重要な点として、チャンスを逃さないためにも、評価を行う時期の重要性が指摘された。また、評価後の処理のあり方を考える必要があることがわかった。例えば、学習者から指摘された点についての教師の対応である。変更する場合は問題がないが、変更をしないと決めた場合どのように学習者と話し合うかである。

4. おわりに

本稿では2006年に行われた実践研究フォーラムの発表とその後のディスカッションの結果を示した。今回の一番の収穫は小グループディスカッションである。濃密な話し合いが長時間に渡って行われ、異なる意見やものの見方を知る機会を得た。また、「学習者からの発信」は印象に残る言葉であった。その後筆者が現場に戻り、授業において、何度か教師が行う決定の部分で迷いが生じる場面が出てきたが、それは、学習者の声に耳を傾けるようになったという現れではないかと思われる。

参考文献

Rubrecht, B. G. (2006). Reasons and methods for learning students' names. *The Language Teacher*. 30. 4. 17-22